（2012.9.16　Heidegger Forum）

《ソクラテス以前》ということ：初期ギリシア哲学の思考様式

内山　勝利

１．今日のわれわれの通念的ギリシア哲学史理解は、次のように概略化されよう。

初期自然学／ソフィスト思想→アテナイ哲学の大成（ソクラテス、プラトン、アリストテレス）→ヘレニズム期の学派哲学への拡散

これは、ギリシア哲学の大成者を自任したアリストテレスが『形而上学』第１巻（A巻）でまとめ上げた記述をもっぱら踏襲して、それに必要な継ぎ足しを行ったものである。ただしこの図式の固定化は、アリストテレスによるというよりも（彼には彼自身の哲学的構想があり、それに即して導出されたものであった）、それをそのまま転用、あるいはむしろ「選択」した近代西欧の哲学世界（19 世紀半ばにその基調を確定した E. ツェラー『ギリシア人の哲学』に見られるように）の側にその責任はある。古代哲学の内部においては、けっしてアリストテレス的な図式が共有されていなかったことは、後のローマ時代になってから（後２世紀末ないし３世紀初）書かれたディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』の構成や記述からも読み取ることができるし、ヘレニズム期哲学の実相解明が進展するにつれて、われわれ自身においてもギリシア哲学像の変容が促されようとしている。特に注意されるべきは、プラトン、アリストテレスによって「大成」されたものの相対化と、初期哲学（Vorsokratik）的要素の後世への根強い浸透・存続である。古代哲学を 1,100 年間（前６世紀—後６世紀初）のスパンで見るならば、前４世紀に成立したプラトン・アリストテレス哲学は、その後一旦ヘレニズム期の学派哲学の中に埋没し、紀元後にようやく「復興」されつつ、その限られた一面が新プラトン主義に糾合されていく。プラトン・アリストテレス中心のギリシア哲学理解とその解釈は、まさに近現代の「発見」であると言うべきであろう。

２．初期哲学はアテナイ哲学を越えて、ヘレニズム期諸学派に継承されるとともに、独自の伝統を長く維持していく。ディールス＆クランツによる画期的な断片集成の実質的最終版（第５版 1934-38）の序文において（Kranz による）、Vorsokratik とは「ソクラテス（ないしプラトン）の考え方をとる学派、したが

って〈ソクラテス以前〉でもなければ〈非ソクラテス的〉でもない古代哲学を経由していない哲学のことである」と周到に注意されているように、けっして単なる時代区分の表示ではない。事実、本書に収められた思想家の多数がソクラテスと同時代ないし彼以降に活動している。たとえばピュタゴラス派の学的活動はむしろ前４世紀以降に展開されているし、本書がその全体の２割以上を当てて、無数の古代著作の中から、わずかな手がかりを博捜して明らかにしているように、古代アトミズムの直接的伝統は紀元前後にまで及んでいる。（むろん、彼らの思想はストア派やエピクロス派などヘレニズム期諸哲学派にも流入して、それらの根幹を担ってもいて、エピクロスの書簡などに窺われる思考スタイルは、きわめて初期哲学的だと言っていい。）また、主としてエジプトから発掘されるヘレニズム期以降のパピルス文書群、顕著な一例としてエンペドクレスが書写されたストラスブール・パピルス（後１世紀後半、20 世紀末に解読）などを見ても、その時代になおソクラテス以前の哲学それ自体が「生きた思想」として相応に広く流布していたことが十分推測できよう。そのようにして彼らの全体像を見直すとき、初期哲学こそがギリシア哲学総体を通じてその基調をなしていたものと考えるべきであろう。

３．しかしその直接的伝統は、一部の医学派や錬金術・魔術的な思想に糾合されたほかは、一旦途絶える。近現代のギリシア哲学研究において Vorsokratiker が改めて注目を浴びることになった最初の契機は、そこに反形而上学的＝科学的理性の哲学モデルを見出そうとすることにあった。19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて相次いで刊行され大きな影響力を持った Th. Gomperz、J. Burnet、P. Tannery といった人たちの著書はそうした立場を鮮明に示している。Diels&Kranz（特に Diels）も、すぐれて科学主義的見地から彼らを高く評価しつつ、断片集の編纂に力を注いだのだった（ほとんどマニアックなほどに周到な古代アトミズム関連資料の収集もその立場をよく物語っている）。こうした研究動向が、アリストテレスによる「自然学者」解釈の影響と相まって、長らく初期ギリシア哲学研究の基調をなしてゆくとともに、その成果が明らかにした Vorsokratiker の大胆かつ壮大な宇宙論構想は W.ハイゼンベルクや E.シュレディンガーといった当時のすぐれた理論物理学者たちの共感を呼び、K.ポッパーも「科学的発見の論理」の典型を彼らに見ている（直観にもとづく大胆な仮説を先行させ、それを事象観察や実験によって実証してゆく手法）。

しかし、少なくともそれのみが Vorsokratiker の本然ではないことは、20 世

紀前半のきわめて活発な初期ギリシア哲学研究を通じて鮮明に照らし出されてくる。まず第一に注意されるのは、彼らの宇宙論はその内なる人間のあり方と直結したものとして考えられ、その「自然学」はそのまま倫理規範としてわれわれの生死を律するものとされていたことである。彼らの思想は先行者たる古代の神話宗教に拮抗しつつ、その総体性において、それが担っていたモチーフを継承するものでもあった。最近の研究が明るみに出しているように、むしろ両者に通有するところが少なくないが、それらはけっして宗教的なものの「残滓」と見なされるべきではなく、むしろ古代宗教のもっていた「生を律する力」を宇宙論的基盤から一体的に新たに確立させる営為として捉えることが肝要であろう。

４．Vorsokratiker の思考スタイルもまた創意に満ちたものである。彼らはそれぞれ独自の仕方で「宇宙世界はどのように形成され、それは現にどのようにあり、われわれの生死はその中にどのように絡め取られているか、その洞察に立てば、われわれはどのように生きるべきか」を一貫した問いとして問いかけた。そして多くの人たちがその結果を『自然について』なる一つの著作に纏め上げている。そして、その記述スタイルもまたこの時代にのみ通有の独自性を持っている。

最古の断片として知られている「アナクシマンドロスの言葉」（初期哲学の著作スタイルはすでに彼によって確立されていた）には「このように、やや詩的な言葉遣いによってそのことを語っている」というテオプラストスの評言が付されていて、そのことから、少なくとも断片末尾の「（それらの諸事物は）交互に時の定めに従って、不正に対する罰を受け、償いをする」は確実にアナクシマンドロスからの直接引用と見なすことができよう（→資料）。この「やや詩的な言葉遣い」は、ゼウスや女神ディケーの裁きという神話的伝承を継承しながらも、ここで主題化されている自然過程を神義論にすりかえたり、社会的正義に類同化したりしているのではない。裁き手は神ではなく、時間である。それによってその「詩的な言葉遣い」の内実は、自然の営みが一定の規則性に従ったものであることを表明するものとなっているのである。付言すれば、「ディケー」とはもともと「定まった方途、あり方」を意味するものであったとすれば、後代におけるような倫理道徳的な用法としての正・不正はかえってある種の転用であることにも注意を向けておきたい。彼のコスモロジーの細部はわずかな断片的字句が伝わるのみだが、たとえば諸天体を「車輪」になぞらえることに

よって、譬喩的にそれらに回転のイメージを与えるだけではなく、天体の構造と運行のシステムを「説明」し、「記述」しているのである。（特に太陽についてみれば、その「車輪」のイメージは、天翔る太陽神の馬車の形象を踏まえつつ、それを巨大な車輪として回転し中央から火を吹きだしスポークに対応する仕方であらゆる方向に光を放射する仕組みを記述するものとなっている。）

いまアナクシマンドロスについて見たように、詩的言語と譬喩によりながら事象を記述することは、ほぼすべての初期哲学者たちに共通の特徴となっている。しかし、同時に、彼らの行使する譬喩のありようは、ホメロスやヘシオドスと対比するとき、大きく異なっている。B. Snell の次のような指摘は、直接にはエンペドクレスの比喩的語り方についてのものだが、それはそのまま初期哲学者の多くに敷衍して読むことができよう。

「エンペドクレスは・・・（叙事詩人たちのように）ある特定の瞬間に現れる事柄を問題にしない。彼の行っている比較はすべて、物理的な（あるいは化学的な）過程を具体的に説明することを目指している。それゆえ、その比較は永続的な事柄に関係している」（EdG, S. 196）。

たとえば、目による視覚のメカニズムを語るとき、彼はそれを透明な板を張り合わせて覆いとしたランプになぞらえている（断片 84→資料）。「あたかも・・・ちょうどそれと同じように・・・」という連関詞の用法は、叙事詩から借用した定型語法である（たとえば『イリアス』5. 902 以下：「あたかも無花果の樹液が、純白の乳液をたちまち凝固させ、／掻き回すうちに見る見る固まってゆく／ちょうどそのように素早く、アポロンはアレスの傷を癒した」）。両者を較べると容易に分かるように、ホメロスでは譬喩は当の事柄を適切鮮明に「描写」するものではあるが、その事柄を「説明」することには何ら機能してはいない。それに対してエンペドクレスでは、ランプの譬喩がそのまま目と視覚のメカニズムを説明する恰好のモデルとして提示されている（カメラ構造と目の比較による説明と同じ）。また、『イリアス』5. 902 の「あたかも無花果の樹液が、純白の乳液をたちまち凝固させ」は、まったく同じ表現がエンペドクレスによって「ピリアー（愛）」の結合力の譬喩として援用されているが（断片 33）、そこでは、その力は実際に樹液や膠の凝結作用として発現し、同じ仕方で諸事物を「寄せ集め、合体させ、つながり合わせる」ものとして具体的な説明事例ともなっているのである。

もっとも、他方でそれらはいまだ logic をなしていないことはまぎれもない。その点で、アリストテレスの言うように「〈海は大地の汗である〉（断片 55）と

語ることで、それによってエンペドクレスのように何か知恵あることを述べたと思う者がいたとしたら、それもまた同様におかしなことである。そうした言葉は、詩としてはおそらく満足の行く表現かもしれないが、(譬喩は詩にふさわしいから)、自然を認識するには十分なものではない」(『気象論』B3, 357a26以下）と批判されるべきかもしれない。しかし、そこに見てとらなければならないのは、むしろ logic を目指すのではない方向での、別の独自の哲学的言語の可能性ではないか。「海は大地の汗である」とは、けっして単なる見立てとしてのレトリックではない。世界を有機的な統一体として捉えようとしていたエンペドクレスにとって、それは文字通りに宇宙的規模で生起した「生理的」事象についての直接的記述だったのである。

logic への透明化を目指していなかったことはパルメニデスの哲学詩についても言いうるであろう。彼が「真実在（ト・エオン)」についての記述をヘクサメトロスに託したということが、すでにそのことを示唆している。そのきわめてぎこちない詩行による記述は、むしろ彼が描き出そうとしている事柄とうまく釣り合っているということができよう。長い一連の叙述をなす断片７から８にかけての数十行は、そこに展開された（きわめて ambiguous な)「論理」よりもむしろ定型的なリズムと限られた語句の反復使用との中に押し込まれた「詩的効果」によって、均質一様不変不動の一者のあり方を言葉の上に写し取るものとなっている、とも言えるのである。

この点で、エンペドクレスの場合には、さらにはっきりと叙事詩体による詩の展開を駆使した仕方で、彼の構想する円環的な宇宙過程をそのまま言葉の上に引き写そうとしたものであるのを見ることができる。すなわち、四元の分離過程と結合過程のそれぞれにおける「二重の生成／二重の消滅」による円環的シンメトリーおよびそのサイクルの永遠的反復を、エンペドクレスは、定型詩行の反復と幾重ものうねりによって写し取っている。詩における同一詩句の反復はそのまま円環的な宇宙サイクルの反復を言葉の上に再現しているのである（ただし、その素型は D&K を含めて今日の編纂された断片集からは見て取りにくいが)。

このような詩的言語の持つ触発力の活用は、彼らのみならず、初期哲学者たちすべてに共通している。ここではこれ以上立ち入らないが、たとえばヘラクレイトスの著作は、音韻や複雑なリズム、新しい造語、メタファー、謎かけ、パラドックスなどが縦横に織り込まれ、またときにはテクストの多義性や不明瞭さの意識的使用によって、思いがけない仕方で世界の実相を剔出してみせて

いるのである。

なるほど、すでに触れたように、まさにそのことによって彼らは批判にさらされ、プラトン・アリストテレスらの新たな哲学によって乗り越えられた、と言うべきかもしれない。しかし、やがて哲学的言語の根幹が logic へと平準化されていったとき、それによって一つの理想を達成すると同時に、われわれが世界と生の深みへと切り込んでゆく大きな力が削ぎ落とされたのではないか。自然学的思考を批判しつつ「ロゴスの中での探求」へと転じた(『パイドン』100A)ソクラテス（＝プラトン）は、しかし、さしあたりのロゴス的言表に「ヒュポテシス（足場)」としての資格のみを与え、その先にきわめて困難なディアレクティケー（哲学的対話法）の行程を置いて、言語の持つさらなる力を引き出そうとしたのだった。

初期哲学者たちの思考を支える言語にも、まぎれもなくそれ特有の大きな力が秘められていたのではないか。さしあたりそれについて見てきた限りでは、彼らは、詩的言語の持つ触発力を駆使しつつ、言葉の逐一に最大の負荷をかけることによって、全世界とその内に営まれるわれわれの生を全一的に搦めとり、ただ一つの著作『自然について』の中にすべてを書き込め、宇宙そのものと等価の言語的宇宙を構築しようとしたのであろう。そこに醸成された直感的洞察の鋭さと深さが、今もなおわれわれをわずかな著作断片群へと立ち返らせる所以であり、われわれの哲学的考察を導く大きな可能性の根拠となっているのである。

５．最後に、世界と人間的生との一体性の中で「自然と技術への問い」という今回の統一テーマに即して、わずかに補足的に言及しておきたい。

すでにミレトス派に見られるように、初期哲学者たちにとって、生物が生まれ成長するプロセスが基本的な世界理解を導く糸であった。彼らはその同じ力が宇宙全体にみなぎり、天地の形成やそのあり方を動かしているものと考えたのである。その立場はタレスによる生命原理としての「水」以来、ピュタゴラス派にもヘラクレイトスにも、むろんエンペドクレスにも一貫したものとなっている。ただし、彼らは宇宙を生命体からの類推によって理解しているわけではない。むしろ生物（とりわけわれわれ人間）を全世界と類比構造を持ったミクロコスモスとして位置づけている。天地の絶対的大きさに比すれば、人間の生は弱く限られたものでしかありえず、われわれの生はその力を全自然からわずかに分け与えられて存立しているのだという意識は、彼らの間でのみならず、

そののちもたえず繰り返される基調音として、ギリシア思想を一貫して保持されてゆく。

こうした基本的立場においては、「自然（ピュシス）と技術（テクネー）」という対置の図式は成立しない。「自然」もまた生ける存在として「技術」を内包しうるからである。さらにもう一つ注意すべき点は、今日的な「技術」概念とギリシア的な「テクネー」との間には大きなズレがあることである。少なくともプラトンに至るまでは、それは単なる目的達成への手段的なものにかかわる領域を意味しない。むしろ事柄そのものについての完全な精通のことであり、ほとんど「知識（エピステーメー）」と同義である。今日の「技術」に対応するのは、機械的な仕組みによって人為的な操作を施す「メーカネー／メーカニカ」であろうが、それは一般のギリシア的な知のシステムの中ではつねに脇に追いやられた分野でしかなかった。それはギリシア的学の特性によるものでもあろうが、より大きな背景として、これまで見てきたような、初期哲学的な宇宙と人間の連続一体性の思想が働いているものと思われる。

そのような理念は、晩年に至ってから初期自然学に立ち返ったプラトンにおいて的確に要約されている。『法律』第 10 巻において、彼は「万物は神々に満ちている」というタレスの主張にきわめて強い語調で同意を示し（899B）、古来の「生ける宇宙」を賦活せしめて次のように語っている。

「魂は、天と地と海にあるすべてのものを自らの動によって司る。意欲、考察、配慮、熟慮、正しい判断や誤った判断、快苦、勇猛や恐怖、愛憎の念などと言われるものや、またこれらと同属もしくは第一次的な動のすべてがそれである。これらの動は、次いで物体の二次的な動を受け取り、万物を増大と減少、結合と分離、またそれらに伴う熱と冷、重と軽、硬と軟、白と黒、辛と甘などへと導く。そして魂がこれらを行使する際に、知性（ヌウス）を加勢とするならば、万物を正しく幸福に教導するが、無知と一緒に成るならば、逆に万物をそれと正反対の状態にするのである」（896E-897A）。

このような見地のもとでは、宇宙的大循環を阻害する今日的技術が人の営みとして肯定的に位置づけられる余地はありえなかったのである。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

○<u>アナクシマンドロスの言葉</u>：「存在する諸事物にとって、生成がそれらからなされるその当のものへと、消滅もまた必然に従ってなされる。なぜなら、それ

らの諸事物は、交互に時の定めに従って、不正に対する罰を受け、償いをするからである」と、このように、やや詩的な言葉遣いによってそのことを語っている。（12A9DK：シンプリキオス＝テオプラストスによる。→12B1 DK）

○エンペドクレス断片 84：あたかも、人は嵐の夜をおかして外に出かけようと思うと／ランプを用意し、燃える火の明かりをつけてともす――／どんな風でも防げるように、角板をしっかりとはめこんで、／・・・／ちょうどそれと同じように、かのとき原初の火は皮膜の中に守られて／薄い布地にくるまれるごとく、まるい目の乙女（瞳）の陰に潜み隠れたが、／その膜にはいくつもの精妙な孔があけられ通されてあった。／それらは瞳のまわりにたゆたう深い水を被いさえぎったけれども／しかし火はいっそう微細であるだけに、そこを通り抜けた。

Gomperz, Th., Greek Thinkers, Authorized Engl. Edition, Oxford, 1901-
Burnet, J., Early Greek Philosophy, London, 1892
Tannery, P., Pour l'histoire de la science hellene, Paris, 1887
Snell, B., Die Entdeckung des Geistes, Goettingen　1975 (6. Aufl.)